

第 3 回 「輝くシニア」

平成 1 4 年 7 月 6 日 (土) 午後 2 時 ~ 4 時
福祉センター学習・集会室

コーディネーター：山下 真一氏 長谷川貞夫氏
話題提供者：立川 愛雄氏 小林 歌子氏



市長挨拶

こんにちは。どうもお出掛けをいただきまして大変ありがとうございます。

きょうは「輝くシニア」というテーマになっております。実はこのタイトルを出すときにこちらにいらっしゃる皆さま方と打ち合わせをいたしました。老人という言葉は使いたくないと、高齢者という言葉も余り使いたくないと、ではどんな言葉にするのだと言ったら、「シニア」という言葉がいいということになりまして、それで「輝くシニア」というテーマになりました。

もともと高齢者の時代という、どうかすると身体が弱くて介護保険みたいな問題が多く扱われますけれども、実際には 8 割方はお元気で御活躍されているわけでありまして、そういう意味ではそういう皆さんがそれぞれの立場で輝いていく、そういう形のまちづくりというのができないだろうか、そんな問題意識の中からきょうのテーマになってきております。

~~~~~

開催の趣旨・福生市の概要については、第 1 回と重複しますので、省略いたします。

~~~~~

それでは、あとの時間はもうコーディネーターの方にお任せしたいと思います。一番向こうにいらっしゃるのが長谷川貞夫先生でございます。学芸大学の教授で、教育委員もやっております。後ほどまた自己紹介のときにいろいろお話がある

と思います。

お隣が山下真一さん。武陽ガスの常務さんです。それからきょうは話題提供者という形でまず立川さんでございます。94歳の方です。それからお隣は小林歌子さん、老人会の副会長としてさまざまな地域活動を含めて活躍していらっしゃいます。お二人にいろいろ話を伺いながら進めていきたいということでございます。それでは山下さん、よろしく願いいたします。

山下

御紹介いただきました、本日はコーディネーターを務めさせていただきます山下真一でございます。よろしく願いいたします。

コーディネーターを去年も私、商工業というテーマでやらせていただきましたけれども、今回 2 回目でございます。このテーマを市長からいただいたのは多分、私は親子同居でございます。父親は私の会社の創業者でございます。現在 76 歳、母親は 70 歳、あと子どもは二人おります。三世代で暮らしている、こういう話は山下がいいだろうということ言われて選ばれたというふうに思います。

あと市長の方からちょっとございましたけれども、きょうのこの会については後ほど文書で残すということで、前回もきちとかなりいい冊子をつくっていただいておりますので、ぜひ皆様から活発な政策提案をいただければなというふうに思います。そうしますと後ほど冊子の方はいろいろ考えていただいたり、そういう御要望についてはいろいろ出されるのではないかなと思っております。

ぜひきょうは、ヒントということで、立川さん、そして小林さんから話題提供をしていただいて、またそれについて皆様からいろいろな御意見をいただければと思います。

それでは、最初に立川さんから郷土史の関係でお話を少しいただきたいと思っております。それでは立川さん、よろしく願いいたします。

立川

立川でございます。先ほどありましたが、94歳でございます。たまたま数年前に「多摩のあゆみ」の 85 号記念ですか、それに自分のことを書いています。こういうものです。

私は生粋の多摩っ子で、94歳、武州多摩郡日野本郷の枝村、東光寺の産。今や日野市栄町五丁目とまことに味気ないのだが、村の高台には縄文の遺跡やセツ塚の古墳群が残っています。ここは、武蔵七

党の雄「西党日奉氏」の本拠地であったと言われております。豪族「日奉氏」が居館の鬼門除けとして創建したのが東光寺です。今に薬師堂が残り村人は、これぞ「安産薬師如来」なりとの伝承を信奉しています。また村内に新設の小学校が、「東光寺小学校」と命名された。故里の歴史を偲ぶ配慮によるものか、嬉しき限り感慨ひとしおであります。

武蔵国府と甲斐の国府との官道に位置する、上古の官道は武蔵の国、国府府中から小野本郷を通り、万願寺村と東光寺村、それから本丹木、八王子ですね。それから高月、それからあきる野と、檜原を通過して小河内へ回る、それで甲斐の国へ入ったのが、これが昔の甲州街道です。そんなわけで子どもの時から何となく歴史に愛情を持っております。

昭和5年に台湾にまいりまして、「台湾高砂族旧慣民族調査」の末端調査員として参加しました。また、台湾警務局の語学研修生に採用されたり、いわゆる台湾人相手のいろいろなことをしてまいりましたが、16年間して引き揚げてまいりまして、住宅難のためにいろいろございましたが、福生に住宅地ができましたので、誘われてここにまいりました。

孟母三遷の教えとか申しますが、当時として福生というのはおっかないところでもございました。しかし、そんなことは言うておられませんので福生へまいりまして、我がまち福生のためにも、我慢したと言ってはなんですが、一生懸命やりまして、ついのすみかとなったわけです。

たまたまここにもありますけれども、荻野三七彦先生がこういうことを言うておられるのですね。

「自分の育った故郷を回想するところに愛郷心がある。それを拡大するならば、それは愛国心にもつながることである。故郷に残る歴史的なもの、それは有形、無形のものとして遣り、伝承しているであろう。由緒あるもの、こうしたものを伝える土地や、これというものの何もない土地と、その地方地方に相違がある。しかし由緒があるからと言って直ちにその由緒を信じる訳にもいかないだろうし、また何の由緒もないと思って、これも調べてみると意外にも新しい発見が生まれてこないものでもない。そのいずれにしても、まず自身に手を染めてみないことには、故郷の歴史はわかるものではなからう」と、こういうようなわけで、それから郷土研究に入るといことですが、私、昭和40年ですかね、40年の4月に福生市の文化財調査会、郷土研究会ですね。それを創設しまして現在に至っております。

そしてその仕事として市内の巡歴とか探索、また拓本講習による技術会得により金石文の記録、採集だとか、そういうことをやっておるわけです。その結果、私の自慢ではないですけども、例えば当時清岩院の開祖がわからないという記録がありました。それを探して突き止めて、清岩院の開祖は加藤勘助さんと言う方であって、その方のために昔は清岩院ではなかったのだけれども、加藤勘助が清岩院さんというので、その名前を借りて清岩院ということまでわかってきた。

そうかと思うと永昌院というのがございますが、

その永昌院なんかは福生の記録には一つもないのですね。あそこには福生が一番古い、1302年、そのような石碑なんかが残っています。大変昔は盛んだったところですけども、なぜか永昌院という言葉がひとつも記録にないのです。

福生の地名なのですが、福生の地名についてはいろいろありますが、吉田という人が書いた日本地名辞書というのがございますが、それは明治40年にできた地名を書いた物では代表的な存在なのですが、それでも福生、福生の「福」はわかっているけれども、「生」はどこかおかしい、とそれしか書いてないのですね、ただ1行しか。それが昭和33年に現地調査にまいりましたときに、東京都からの指示を受けて、たまたま清岩院の和尚さんに、こういうことになっているけれども、福生の清岩院はフクショウザンだったのですね。フクショウザンと福生は何か関係ありますか、由来等がわかれば、さらにおかしいというので、そのときに何気なく素直に、「いや、福生と読みますよ。福生、結構ですよ」生の字はちゃんと「さ」と読みますから、恐らく寺の和尚さんが何かがつくったのでしょけれども、福生の「生」、これはもう生む、こういうようなわけで、それからそれが福生の地名と相なりまして、しかしその福生とは何が福生かということ、なんとアイヌ語だとか、あるいはいろいろありますけれども、今から想像しても仕方ないような気がするのです。

そういうようなわけで、私の方は36回の文化祭がありまして、例えば福生の紋章を調べてみたり、そういうふうにいるいる、あくまでも私たちの住んでいる部落の古いことを継承させていくような仕事を進めております。

そのようなわけで、きょうは時間がございますので、また皆さんの方で質問でもございましたらお答えしたいと思えますけれども、どうぞひとつ皆さんも、ついのすみかになった福生でございます。私達もこの土地の土になるのではないかと思います。福生のために大いに関心を持って、また福生の土地を愛し、正しいまちにしたいと、そんなわけでございます。

以上でございます、何かございましたらお教えしたいと思います。先般、福生広報の、福生の橋の執筆をしました。ああいうものは皆さんから聞いたことをもとにして書いたのですけれども、あるいは間違いもあるのではないかと思います。どうぞ皆さんからもいろいろ御指摘といいますが、いろいろお教えいただければ幸いです。

以上でございます。(拍手)

長谷川

ありがとうございます。立川さんのお話はきょうのテーマであります「輝くシニア」ということを、立川さん御自身が郷土史の研究を通して実践なさっております。そこで、私の方からちょっと立川さんに一つ質問をさせていただきます。

昭和33年の夏に、東京都三多摩地方歴史民族調査が実施され、地区担当員となられたというふうにお書きになってお話をいただきました。そのきっかけ

というものはどんなものだったのですか。例えば市の方から言われたのか、あるいは自分もその前に少しそのようなことをやっておられたのかとか、そんなことが私達、私の方は実は還暦が間もなくでありまして、シニアの仲間入りするわけですけれども、そのきっかけをちょっとお話いただけますか。

立川

昭和23年にここにまいりましたのですが、見る物聞く物、やはり同じ多摩で生まれましても、私は日野ですけれども、日野と多摩は大分違うのですね。ですから見る物聞く物が珍しかったことや、それから好奇心もありまして、そして当時PTAが盛んでございまして、みんな一生懸命で、PTAで先生方と話し合ったときに、たまたま昭和33年に東京都で社会科の先生が中心になって民族調査というのがあったのですね。その時に、調査の項目としてはたしか150項目ぐらい、アンケート式に、何か古い民具はありますかとか、お寺に行かれますかとか、墓地はどうなっていますか、そういう墓地がありますかとか、こういうような先生、これは先生ご存じでしょうけれども、木村先生とか、関根先生とか、笠岡先生、最近は坂上先生もおられたと思いますね。そういう先生方が一緒になってやってくれというようなことで勧められまして、そして当時は報酬も何も無い、無報酬ですけれども、たしか33年ごろ調査して、それを報告したわけです。

長谷川

ありがとうございます。少子・高齢化、あるいは情報化、科学技術の向上、国際化、市民参画、いろいろなのが今山積みになっていまして、市もそのため高齢化について検討するチームをつくっておられるということで、その対応策が元気に高齢、まさに市民が立川さんのような方になっていただいたり、そのことは財政的にも元気にしていかれると助かるのではないかと勝手に私は思ったわけですけれども、皆さんの方からお聞きしたいと思います。



山下

ぜひ皆さんの方から何か御質問なり、何か郷土に関してこういう思いがある、とかいうことがあれば

おっしゃっていただきたいと思うのですが、いかがでしょうか。

それでは、時間も限られておりますので、二つ目の話題にさせていただきたいと思います。

もう、お一方、話題提供者ということできょうは小林さんにおいていただいております、小林さんの方から、日頃老人クラブでいろいろ御活躍だということですので、老人クラブについていろいろお話いただきたいと思います。

小林さん、よろしくお願ひいたします。

小林

皆さんこんにちは。ただいま御紹介いただきました、私は福生市老人クラブ連合会の方で副会長を仰せつかっております。

そもそも私が老人会というものに入りましたきっかけをちょっとお話させていただきたいと思うのです。普段、「老人会にお入りになりませんか」とお誘いをしますと、まず10人のうち半数以上からは「まだ老人会なんて早いよ」という言葉が返ります。それとまず老人会なんかという、「なんか」という言葉が、私は老人会活動の中に入っております、とても異端のような感じ方をしますのですね。と、言いますのは、私は本当に老人クラブに入ろうと思って入ったのではなくて、たまたまうちの姉が入っていて、私は2月28日が誕生日なのですが、そして誕生日が過ぎますとちょうど年度切り替えの3月でございまして、「うちの妹が今年ここで還暦になったから、老人クラブに入ると誘いに行ってくれ」と役員さんに話し、役員さんがうちの方へ出向いて来られたのです。

私はその時、別に老人会というものも卑下しておりませんし、大体が私自身の性格として、どうもおせっかいやきなんでしょうかね。人の面倒を見たり、何か人に頼まれるとどうも嫌ということが言えない性質で、後になって後悔するようなこともまま、自分でも感じます。それで「ちょっとまだ早いだけども」と自分でもまだうちで内職かたがた編み物なんかを教えておりましたので「ちょっと」と言ったら、「老人会に入ると旅行なんか一緒にいけるし、あんたが入ってくれば一緒に旅行に行けるからとにかく入ってくれ」と、言っていますと言われましたので、安易な気持ちで、では会費だけ納めていけばいいわねというので会費を納めて入ったのが老人クラブに入ったきっかけでした。

それで1年ぐらいは旅行も一緒にには行けませんが、余りどこも歩かなかったのですが、たまたまうちのクラブの方で役員をしていらっしゃる方が何かにつけて声をかけてくださるのですね。「きょうは会合があるからどう？ 忙しいのならいいけどどう？」と言うのですが、ちっとも出ないでいましたら、1年ぐらいたった頃だと思っておりますけれども、「歌ちゃん、きょうは暇？」ということで電話が入ったのです。「うーん」と言ったら、「きょうはこういう訳で会合しているから出てこない？」と言われて行きました。

とにかく老人クラブの会合に入った時の、大人の

世界に子どもがぼつんと飛び込んだような、本当にそんな雰囲気だったのです。私はその雰囲気だけは今だに忘れないのですけれども、自分で老人クラブの中に入って、若かったせいもあるのでしょうか、入りまして2年目ぐらいからお役をいただきまして、会長のなり手がいないということで、平成5年から老人クラブの地元の会長をさせられまして、させられたという感じでしたけれども、させていただきまして、老人クラブ連合会の方に入りました。いろいろな仕事で皆さん方のお話を伺ったり、当然会長をやりましたからいろいろな面で自分の活動もしなければならぬ。広報もしなければならぬということが必然的に自分自身に与えられた仕事として動き回っているうちに、老人クラブはそんなところの場所ではないのだという、本当に老人クラブという、確かにネーミングは悪いです。でも老人クラブの組織というのは、今までやはり60を過ぎますとどこかで働こうと思ってなかなか正社員としては雇っていただけない面もあるかと思っています。ですがやはり今まで培ってきた知性ですとか、地元におきましてもいろいろな貢献度があったと思うのです。そういうものを活動の中に、やはりそういった組織の中に入っていけば声がかかってくるのです。それで働けますし、自分自身が振り返ってみて「あっこれが生きがいにつながっていたな」と、今現在ではそう思っています。

たまたま東京都の老人クラブの方にも参加させていただき機会がございまして、役員として登録させていただいておりますので、いろいろな勉強をさせられました時に、たまたま秋田県の社会教育課の次長をしていらっしゃる方が、東京都の老人もこれからはいろいろな勉強をしなければいけないということで、老人大学というセミナーがありました。そのセミナーに東京都から代表で出るということを言われました。お昼を食べております時に、皆さんから見るとまだ64~5歳でしたから若く見られたのです。それで「小林さん、老人クラブの仕事はおもしろいだろう」と言われたのです。「いや、まだおもしろいとは感じませんけれども」「そうしたら大変か」と言うから「いや、大変でもないのですけれども」と言ったら「そのうち老人クラブの仕事はおもしろくなるよ。そのおもしろくなったらあなたの生きがいにつながるよ」という言葉をそこでいただいたのです。

何気なく聞いてきた言葉なのではけれども、とにかく私が今現在、老人クラブの中で皆さん方と一緒にできるだけ活動して、何かの集まりには皆さんごぞって参加してください。本当にクラブの中でも、それから女性部でもいいので、女性部の中でも私は確かに人使いは荒くて、そして何か物を言うのでもばきばきとやってしまいますので、反発を買うこともあるかと思うのですけれども、でもやはりそういった活動が自分に今与えられて、なんとなくスムーズにやっつけられるなということと、それからまたこういった席にも出させていただけのように少しずつでも自分を構築していったかなと思うのは、その老人クラブの中にぼつんと、大人の中に子どもが

入った、あの感覚を少し直していかなければいけないと、誰でも老人クラブに気持ちよく入って、気持ちよく活動できる場所でなければいけないと、年をとったら特にそういうことは必要だなということと、それから次長が言ってくださったこと、これがものすごく私には糧になっていると思います。

そしてこの間の研修会でも、少し皆さん方にも通じることがあるかと思うのですけれども、いただいた言葉の一つに、大体65歳から高齢者に入ると思うのです。65歳、60歳で定年とうたっていきますけれども、ある程度高齢者の年齢となると65歳以上でしょうから、65歳以上からまず人生80年と言いますから、30年近いこれから残された人生があると思うのです。その30年間の人生の設計を立てて自分自身が豊かに、そして皆さんと、仲間と一緒に豊かな生活をしていく場所が老人クラブの研修の場所ではないかなということをおっしゃった方もいらしたので、あっそれはいいことを聞いてきたなと思って、これからも一生懸命働いていこうかなと思っています。

まず、私は余り難しいことは言えないのです。言えないというか、正確には余り硬いことはだめなのです。それで皆さんにちょっと知っていただきたいということで、老人クラブの目的、私自身が老人クラブに入った時がそうだったのですけれども、老人クラブは何を、どういう目的でつくられているかというその目的というもの、それから基本的な方針というものがあるので、きょうは皆様方にこのプリントを、本の方からですけれども、抜粋させていただきまして、皆さんにお配りさせていただきました。これは老人クラブを私たちがやっていく上で一番基となっておりますことなので、これは後で目を通していただきたいと思っています。

現在、老人クラブも厚生労働省の方からできるだけ健康でいること、皆さん方こういった活動、いろいろな活動に出席できる方、それから仲間同士お互いに旅行に行ったり、余暇を楽しんでいらっしゃる方というのは医療に余りかからないで、ある程度医療の方にも貢献できる方達ではないかなと思っています。健康づくりの予防活動ですとか、私達クラブの組織の中では無理をしないでできるというのが在宅の福祉の友愛活動だと思うのです。そういったことが老人クラブの組織の中で少しずつ、大きくは見えないかもしれませんが、老人クラブとしてやっていけるひとつの活動の内容ではないかなと思いましたが、老人クラブの目的ということと、基本方針ということで述べさせていただきました。

それでちょっと参考までに、これは書いてございますけれども、全国で今13万3138クラブあるのだそうです。この13万3138クラブというのはすごく多く感じますけれども、この老人クラブもここ年々だんだんと下降線をたどるみたいになくなっていくクラブが多いのだそうです。と、言いますのは、結局、後継者が育たなかったと言われてしまえばそれきりなのですけれども、会長の持ち手がいなくてつぶれていくクラブが多いのだそうです。

福生にもそういうクラブが一つございました。それでクラブがなくなって、会員さん達も別にどうということはないのかなと聞いてみますと、やはり会員さんからはクラブがなくなると今までやっていたいろいろな活動に参加できないからつまらない、いろいろな情報が入ってこないから寂しいということとは聞こえてきます。

東京都の中では4万116クラブありまして、会員数としては約40万人近い会員さんがいらっしゃいます。福生市では今のところ26クラブに今年なったのですけれども、去年までは25クラブでした。そして会員数が2379人いらっしゃいますけれども、その中で元気に働いていらっしゃる方、また元気でいろいろな面で活動できる方というのは恐らく半分ぐらいではないかなと思います。

そういったところと、それからきょうここに参加させていただきましたので、皆さん方からぜひお教えをいただきたいのは、これからの私達、老人クラブとしていろいろな面で活動していったり、何かをやっていく時に、皆さん方からこういうことをしたらいいのではないか、こういうところで老人クラブは余り会員さんが増えなかったり、老人だからと横に置いてしまうような形も私達見えますので、そういうことのお話を逆にいただければありがたいなと思います。今回の話題提供者として依頼をいただきました時に、ぜひそれをお願いしたいなと思って参加させていただきました。

とりとめがなく、道がはっきりと一本の筋でお話できなかったかもしれませんが、私が老人クラブに入った経過と、それから老人クラブの中で感じていることをちょっと述べさせていただきましたので、どうぞよろしく願いいたします。(拍手)

山下

ありがとうございます。私、実はこのコーディネーターを引き受けるのに当たって本を1冊買いました、読んだ方もいらっしゃるかもしれないのですが「生き方上手」という本で、聖露加病院の日野原重明先生という、91歳でしょうか、今、現役でやられているこの先生の本をちょっと読ませていただいて、立川さんもいらっしゃるのですが、90歳を超えて本当に元気に活躍なさっているのはどうということなのかなといろいろと参考にさせていただきました。

それとこの本に出ています、老人という言葉が最近非常に嫌われるというか、歓迎されていないということで書いてあったのですが、老というのは本来尊敬される対象に使われている言葉なのだということ、若い人にあんなふうに年をとりたいと思わせるような老人になろうというのがちょっと書いてあるのですね。

ですから本来、老人というのは非常に尊敬に値する方達に対して敬意を持って使っているという言葉だそうなので、我々も言葉に、本来どういう意味があるかというのを考えながら使って、イメージだけで余りよくないということではなくて、使いたい

なというふうにちょっと思いました。

それでは今、小林さんの方から老人クラブの活動等について、何かこんなことがあったらいいのではないかと、そのような形、また老人クラブ活動、実際参加なさっている方も大勢いると思いますけれども、私達のクラブではこういうことをやっている等の御紹介がありましたらぜひ御遠慮なくお話をちょうだいしたいと思います。どなたかお話したださる方はいらっしゃいますでしょうか。どなたかお願いできますでしょうか。

Aさん

実は私は老人クラブに入っていないです。入っていないというのではなくて、福生へ越えてきてから20年になるのですが、ですから地元の方から言わせるとあんないいところはないというのですが、私はよそ者なのですが、地元のためにずっとやってみたくて老人クラブに加入したのです。したのですが、家内は今も老人クラブに入っていますが、私はやめました。町会の方に気に入られなかった。そういう雰囲気は当時はあったのですよ。

私は今、現に高齢者の関係の仕事に取り組んでおりますけれども、自分は別の形で高齢者の活動に取り組んでいます。ですから、もう少し開かれた老人クラブであってほしいですね。そういう何でもオープンに言えると、白梅会館で立川さんがずっともうしっかり代表でやってこられた熟年ひろばは、これは昭和55年からですから、22年も続いています。立川さんと私はちょうど一回り違いで、同じ申年で、私は一回り下の82歳なのですが、今は立川さんの後に引き続いて代表をさせていただいておりますけれども、そこはどなたがいらっしゃって、どんな話をしても、品のない話だとか、そういうことがあっても大丈夫です。非常にわきあいあいとした雰囲気で毎週金曜日10時から12時までやっております。

そういうことが非常に高齢者にとっては安らぎの場だと、そういうことが必要だと思いますけれども、そういう意味で少し老人会は保守的なところがあるので、そういう気がします。

長谷川

ありがとうございます。そういう意味では私も十分よそ者でございます、何年か前にあるシンポジウムで福生は大嫌いだということをいってしまったにもかかわらず、いろいろとその後は皆さんにも福生を好きになってもらうために動いているようなことでございます。

山下

ほかにありますか。どうぞ。

Bさん

一老人会の会員として参加させていただきました。去年地元の地域の老人会に入れていただきました。その前、今、小林さんのお話の中である言葉を非常に、老人会楽しくなるよという言葉をお願い

たのですけれども、私も昭和63年から平成3年まで、町会長をさせていただいておりました。そして町会長というのはご存じのとおり各ブロック長さんとか、老人会長さんとか、各種団体の長のところへいろいろプリントを持ってお願いに行きますね。そうするとまた嫌な仕事を持ってきたのかよというような顔をされる役なのですけれども、私のところの方が、今は亡くなってしまったのですけれども、老人会長さんがいつもにこにここと、いろいろな会館の清掃だとか、お祭りの神酒所づくりだとか、厄介な仕事をお願いに行くと、「御苦労さまです」という言葉の代わりにありがとうございますと、言ってくれるのですね。お願いで行って、お願いする前に向こうはありがとうございますと、うやうやしく紙をもらってもらうのが非常に私は感動しまして、それからずっと私も今度はそれを真似しまして、いろいろな仕事があっても「御苦労さま」よりも「ありがとうございます」という言葉を言うようにしております。その今ここに書いてある「輝くシニア」という原点は、やはり人間は言葉でしょうから、今、小林さんのお言葉からそんなことを考えました。

そして今、私は昭和11年生まれですから、十分老人会の会員の資格があるということで去年入れていただきました。そして今年の6月14日に市民会館大ホールで福老連の老人芸能会長になりました。各地区から芸達者な人がいろいろ舞台上がりまして、うちの牛一の老人クラブは「南国土佐を後にして」を浴衣で踊るということになり、会館で練習が始まりました。大概そういう浴衣を着て踊るという場合は女の人の会員が多いわけなのですが、「Bさん入らない？」と、こう言われたのです。町会長が入るとということで、ちょうど班の総会のように相談しまして、私も一杯いただいて何気なく「踊る」と言ってしまったのです。そういうことで練習に出てこいということで練習させられまして、今年、大ホールで「南国土佐を後にして」を女の人が10人、男の人2人が入って踊りました。非常に恥ずかしかったけれども、気持ちよかったです。

そして最初から最後まで老人芸能大会の冊子ができました。一応ここに「老人」という言葉はちょっと嫌だなと思うほど若さがあったのですね。熟年といいますが、やはり小林さんが言うように、活動に出る人は丈夫な人ばかりですね。寝たきりの人はいないですね。本当に単純かもしれませんが、70歳の人には60代歳に見えるし、80歳の人には70歳代に見える、若く見えるというのは、若さを保っているのですね。これが老人会の力ではないかなと、これが「輝くシニア」ではないかなと思えました。

以上です。

山下

ありがとうございました。ほかにどなたか、老人会の方の発想で。

Cさん

私はCと申しまして、牛二町会の方に住んでおり

ます。福生にお世話になったのは昭和32年に、私も所帯を持ちまして、ある縁から福生にお世話になるようになってから今日に至っております。

先ほど小林さんからの老人会、一応福寿会というふうに呼ばれているのが通常でございまして、これは全くいい名前だなと、私も実感しております。

それで私が福寿会に入った動機というのは、小林さんとちょっと違っていて、一部の方は御承知かと思いますが、私の母親が明治25年8月26日に出生しまして、平成4年5月11日まで何不自由なく、それも自炊で自活しておりました。それで病院に入院したのはわずか1週間でございまして、それまですこぶる健康で生活できたのは、福生という素晴らしいまちに住むようになって、皆様がいろいろお世話してくれた賜物だと、こういうふう信じておまして、それも私どもの方に母親が来たら、三鷹市に姉が住んでおまして、それまで兄と一緒に住んでおりましたが、兄の死ということから90歳でうちの母親は私どもの方にまいったわけでございませぬ。

それから計算しますと、御案内のとおり99歳8カ月15日という長寿を全うしたと、それでそのときに母親から感謝を、これは皆さんのおかげでこういうふうに長寿を全うできたのだから、私はもう年の関係で皆様にお礼ができませんと、したがって母親が私に「私に代わって皆様にお願いいただいたことをお返ししてくれ」ということで、私も60歳になりまして、会員としての入会資格が得られましてからすぐに入りました。

それで私の思いは、私以上の年齢の方とか、不健康等々で私より若いけれども不都合な方々のためにお世話させていただこうと、そういうことで入って今日まで地区長とかいろいろ役を仰せつかって活動をさせていただいておりますが、現在は副会長ということで会長を支えながらお世話に邁進している次第でございます。

それから福寿会が縮小傾向と申しますが、その一つとして役員、すこぶる会長になり手がなくなっていくことを私も重々感じておりますので、私ども福寿会といたしましてはできるだけ会長の負担を軽減するという意味で、副会長なりほかの役員各位に相談して、総務職担当とか、それからスポーツ・レクリエーション担当とか、イベント担当とか、そういうふう大きく三つの部門に分けて、それでほとんど会長が最終的に決裁すればいいような方法を採用させてもらいまして今日までできております。

ですから小林さんが先ほど二つの課題と申しますが、そのことにつきましては、私ども福寿会に入会した折り、それから会長の仕事と役割を軽減することによって、会長のなり手がいないから存続できないということも解消できるかなと、そういうふう思っています。

それから私自身は、福寿会というのは私自身で皆さんと友愛でいろいろ「輝くシニア」ということで過ごすのも結構ですが、先輩各位にいろいろな面でお世話することも重要な働きではなからうかと、私はそういうふう思っています。

それから昨今の状況でいきますと、市も高齢者の一人暮らしとか、引きこもりとか、いろいろそういうふうな難問を抱えておりますので、私どもは入会する方につきましては、基本的には一人暮らしの方にできるだけ声をかけてそれで入会していただこうと、これは市長は私にいろいろ貢献して欲しいと、できるだけ理解をお願いしているわけですが、その中でも結局その問題は承知しましたので、それから一人暮らしの方をいろいろと訪ねて、5人ほど一人暮らしの方に入っていました。

それでこれもやはり福生に在宅介護支援センター、そういうものが三つほどあるようでございます。それからそのほか民生委員の方々もいらっしゃいますが、やはりきめ細かいお世話をするには地元の利を生かして、福寿会組織をもってあえてお世話をさせていただくようにすればいいのではないかと、それでただいま考えているのは、できるだけ、できれば1日に1回ぐらい一人暮らしの方に電話をおかけして、「きょうは元気ですか」とか、また時々訪問するなりして、それぞれ一人暮らしの方の引きこもりとか、それとか孤独死とか、そういう状況に至らないようにいろいろお世話するのも、ひいては福生市の行政についてもいろいろお世話になっている関係で少しはお手伝いになると思います。そういうような思いで福寿会の方はお世話をさせていただいております。

以上です。

山下

ありがとうございました。ほかに何かございますか。

Dさん

福生市熊川の鍋二町会におりますDと申します。当年90歳です。

今、大変そちらの方からいい話を聞いて感激しています。実は老人会のことについてお話しますが、福生の人口は6万2000人、そのうち外国人が2000人、6万人で高齢者の比率は13.3%という数値が出ています。それでいきますと8000人ぐらいになると思います。それで小林さんが言ったようにデータを見ますと、約30%であります。私も老人会の会員なのです。せめて選挙の投票率ぐらいはと思うわけです。

先ほど今、お話を聞いていると非常に会員の獲得に努力されております。これは私自身そう思うのですが、なかなか努力がないのですが、本日お集まりの方でもし入る気のある人があったら、老人会に入ってやはりまちづくりの、全部で13%、約8000人ですね。これぐらいで、50%ぐらいになると4000人、そう減少するものではないかと思えます。具体的に今、牛浜の方のお話やら、変なちょっと上ずったようなお話になりますが、老人会でも努力しておられると思います。私自身もまたやろうと思えますし、今までも会長に協力したいそんなことを思っています。

どうかみんなで力をあわせて、まちづくりのため

に努力したい、こんなふうに考えております。具体性がなくて申しわけないのですが、私の考えです。ありがとうございました。

山下

ありがとうございます。きょうはお二方90歳の方がいらっしゃいます。先ほど来た名簿で、Dさんとお聞きしていたのでどなたかと、それらしき方はいらっしゃらないのでちょっとびっくりいたしました。非常にお若くて、ご活躍ということでございます。

では小林さん。

小林

貴重な御意見いろいろありがとうございました。老人クラブというより福寿会の方もいろいろなことを行事としてやっております。それできょうはちょっとここにかねがね、ほんのごく一部でございますけれども、福寿会の福老連としてやっております行事で、まず今一番重大的にやっておりますのは健康づくり講座ということでございまして、健康でいられるようにと、これも厚生労働省の方から病気の予防にということでいろいろな援助とか、器具の試供者の方に購入の補助がございまして、いろいろ健康づくりに取り組んでおります。それもひとつの環として健康増進部の方から、いろいろなゲーム機といったらおもしろいですが、グラウンドゴルフですとか、健康機とか、これは年に2回開催しております。そのほかには世代交流という言葉がまず大事だと思うのです。いろいろな今、小学生ですとか、中高生の方々の中でいろいろな問題点が起きる中で、私は余り自分では年寄りだとは思っていないのですけれども、自分自身ではよくいろいろなことを聞いたりしますと、昔と今と違いまして、今は核家族というのですか、小さいお子さんと一緒に生活して、おじいちゃん、おばあちゃん一緒にという御家庭が少なくなっていますね。1軒のお宅でも上下に住んでいるとか、上は何をしているのか、下はある程度別行動でというような、プライバシーの面もございましてしょうけれども、それを踏まえて、何年か前に、これは私の住んでいる前にすみれ保育園がございまして、そこで世代交流ということで、すみれ保育園で、あそこにパネルがございましてけれども、先ほど皆さんにも見ていただきましたが、子供たちと触れ合ってみました。

触れ合ってもらった時に、小さいお子さん方から接触する感覚ですか。感触というのはすごく私達高齢者にとっては若返りの一つなのですね。ここにいらっしゃるおじいさんが一人、後で御覧になっていただくとわかるのですけれども、何年も孫の手を握ったことがなくてうれしかったよとおっしゃってくださいました。

そういったこともやはり一つの交流のもとだと思えますし、地域の貢献活動ということで、今、老人クラブでは年に、これは大々的に全国同時に「社会奉仕の日」と銘打ちまして、5月20日に公園とか自分たちの住んでいるまちの清掃を行っており

ます。この清掃も町内の方で全然知らない住民の方もいらっしゃるのですよ。たまたま私達がお掃除をしていますと「あっきょうは老人会の人があそこを掃除してくれたみたいだよ、ありがとうね」という言葉も返ってくるのですけれども、年に1回ぐらいのことですと、なかなか清掃もということなのでこれからは、何年か前からちょっと、野澤市長になられてから提案をいただいたことなのですから、自分達の住んでいるまちは自分達できれいにしようじゃないかということで、ある程度公園ですか、その周辺を掃除しましょうということでやり始めた単位クラブもございます。またその企画にかけては、今の福老連の方も公園ですか、掃除しましょうということに各単位の方に声をかけてその準備が進められております。

たまたま去年、これは私どもが一番汚くてどうしようもなかった西友の横の公園を掃除しまして、その時、市長さんに来ていただいて、ごみの前に座っていただいた写真があれです。市長さんがいつも通る時に汚かったのだよとおっしゃってくださって、もう本当にごみでくちゃくちゃになったところで皆さんと写真を撮らせていただきました。

この写真の中にいろいろちょっと、子ども達と交流しているとか、地域の貢献活動ということで、やはり私達は自分達の手先の仕事ですとか、手先を使って何かをするというのは脳の活性化にもつながるといふことなので、できるだけ何かをつくって皆さんに差し上げることも喜びの一つなので、いろいろ活動しております。

それからスポーツ、ダンス、余暇活動といっております。そこに映っておりますのが、先ほど議員さんの方からお話がありました芸能大会の踊りですとか、それからついこの間の6月23日にありましたみんなの運動会の、スナップを1~2枚ですけれども、参考までにあそこに飾らせていただくようにいたしました。

老人クラブも、先ほどそちらの方で、牛二の方も言ってくださった友愛活動の取り組みもありますし、それからそのほかにやはり皆さん方と楽しくすることも、やはり楽しくなければ老人クラブではないと思うのですよね。自分が楽しくなければ会員の皆さんも楽しんでいただけないと思うので、できるだけ地域の中で皆さんと、その地域性というのもでございますしょうから、地域の中で自分達に見合ったニーズでもって活動していただけたらなと私は常々思っているのですけれども、ちなみに、老人クラブといいますが各単位クラブから始まりまして市町村の老連、それから老連ごとの芸能会、それから東京都がありまして、東京都から信越がありまして全国に広がっておりますけれども、全国の老人クラブの中で今までは男性上位といいますが、男性の方の会長さんが多くて、女性の意見が入らないということで、平成5年度ぐらいから女性の意見も、女性の参加をということで女性委員会というものが設立されております。

それで私ども福生市でも平成6年12月から女性部というものが編成されまして、各単位クラブか

らお一人ずつ代表で出ていただいて、それで老連の中で、老人クラブが主体になって女性部の方がそれに参加したり、協力をしたり、またいろいろ活動に取り組みながら、女性だから気がつくのではないかなということも、クラブの活動の中に参画させていただいて活動しております。ちょっとご存じない方も数多くいらっしゃるかと思いますので、ちょっと報告させていただきます。

決して老人クラブはそんなに硬いところでもございませんし、組織の中に入ればいろいろ活動にも参加できると思うのですよね。一人ではできなくても、ビートたけしですか、あの人が漫才やっていましたけれども、「横断歩道一人で渡れば怖いけれども、大勢で渡れば怖くない」とおっしゃいましたけれども、やはり組織の中で皆さんと一緒に、何かいいこととするのも一人でやるのは照れくさくて、みんなで一緒ならばできるじゃないですか。

そういうことで、できましたら老人クラブ、福寿会の方にも大勢加入していただいて、気がついたならばやはりこういうふうに声をかけていただけて、気がついてみればやはり私は輝いたシニアでいたいなど、最後の最後まで輝くシニアでいたいという思いできょうのフォーラムに参加させていただきました。どうぞ皆さん方、老人クラブは何だということではなくて、可愛がっていただければありがたいと思います。

いろいろとりとめないことを申し上げましたけれども、よろしく願います。ありがとうございました。

立川

私も老人会で、会長をしております。老人会の会長というのも確かに難しいです。考えてみますと、60歳から上は94~5歳までの者までおりますので、大変構成が複雑ですから、集まりにしましても、例えば私の方は110名のうちに大体毎月集まるのが40名、結局3分の1ですか、3分の1がわざわざ一緒にお茶でも飲もうと出てくるのですが、あと3分の2の方はかったるい、人がいるし、まだ年をとっても現職だ、そういう声もあるのです。

そういうわけで、老人会の運営というものは大変で、お付き合いしたらかえって腹が立つという人もありますけれども、それでなくてぜひ参加していただければと思うのです。それなりの一つの機関としても私の方でも今PRというか、連絡のために、私が私報ですけれども、会報をつくっております。現在192号を出しましたが、毎月皆さんにお配りしていますが、これも内容がどの程度かわかりませんので、皆さんが入って間もないという人もありますし、喜んでくれる方もあります。

いろいろあの手この手でやっているのですが、毎月1回のお茶飲み会、それから毎月1回の公園の掃除、それから毎月1回の歩け歩け、その間にやはりひとつのサークルとしてゲートボールの好きな人、それから手芸の好きな人、それから歌とか、いろいろサークルをやっておりますが、120人の会員が一緒になって果たしていくということはちょっと

困難でございますが、しかし現在でもできるだけ都合をつけて、せいぜい月に1回ずつぐらいは参加していただいて、2時間でも3時間でも短い時間ですけれども、顔を見るだけでも結構ではないかと思えますし、話を聞くだけでも結構ではないかと思えます。またカラオケでも歌いたい人は歌えますが、それも結構ですが、ぜひひとつ皆さんに老人クラブに集まっていたいただきたいと思えます。

先ほどDさんからちょっとお話がございましたが、今、福生には高齢者の方がいろいろ住んでおります。これは老人会とは別でございますが、結局内容は同じなのです。結局市内の老人会での老人で、こころみのある方は各公民館単位で集まってお茶飲みをしようではないかという制度といいますが、サークルでございますが、公民館の本館、それから熊川の白梅会館、それから武蔵野の松林会館、あそこで毎週、熊川の白梅会館は毎週金曜日にやっていますが、本館の松林会館の方は月に2回で、そしてお話し合いですね。

別に難しい会ではないのです。よその市町村では同窓会だとか放送大学か、なにかそういうようなことをやっていますが、私どものテーマはそうではなくて、例えばメダカ学校制度、昔は「ちいちいぱっぱ」でスズメの学校というのがございましたが、今は大体文部科学省でもスズメの学校制度はやめて、メダカの学校形式というふうにやっているそうです。だれが生徒でも先生でもありません。お互いにもう年もとって、酸いも甘いも心得た者同士が、もう全部、覚悟はつけて、そして集まって、体操して、お茶でも飲みながらお話をすると、ですから我々例えば白梅会館は毎週金曜日10時から集まりまして、会費は月に300円ですが、大体飴玉二つにお煎餅3枚で、そしてお茶を飲みながら好きなことを言っております。お互いが自分の新聞を切り抜いて持ってきてやったり、あるいはそれをコピーしたり、さまざまなことを、耳に入ったニュースを御披露するとか、とりとめないような内容ですけれども、2時間本当に楽しく過ごしまして、最後には校歌合唱で、福生市の歌を歌って終わっております。

大変人気があり、もう大体1000回、昭和55年から始まったのです。そういうようなことでもう1000回ですから、大正の者ばかりしかいない。昭和55年に、恐らく今の市長さんが社会教育をやっていたころではなかったかと思うのですね。55年の4月に始まっています。老人の高齢化対策を何とかしなくてはと行って始まり、56年の6月に第1回をしまして、それからずっと、なかなか途中で休んだこともありますが、ずっとまだ今でも続いております。皆さん楽しかったと言っております。

西多摩新聞が確か白梅会館の熟年ひろばというのを紹介してくれましたけれども、大変楽しい。ですから老人クラブは楽しいので、できるだけ老人クラブに参加していただいて、それで、もしお暇がありましたらならば週に1回なり、あるいは松林会館や本館は月に2回ですけれども、身近なそういうサークルに入って、そして一緒に楽しんだり、勉強というまではいきませんけれども楽しい、一つのまち

づくりになると思います。ぜひ御出席いただきたいと思えます。

今、お配りしましたけれども、例えばうちの方の会報、一番最後のページには川柳がありますね。「デジカメのえさは何だと孫に聞く」そんなサラリーマン川柳「国民にしわ寄せよりも幸せを」こんな詩を書いてみたり、それから2ページの上には、2ページ、3ページ、子どもと育つ舞の海さんですね。これは日経ですけれども、彼の妻は再婚ですけれども、子ども達が今まで舞ちゃん、舞ちゃんと言っていたのが始めてお父さんと呼ばれて感激している。その次が戦争の方で「母のぼたもち」埼玉県の81歳の方が書いています。その下には「私に席を勧めたおじいちゃん」と、17歳の高校生、こんなのが出ています。それでその下にあるのが「いわせてもらおう加齢！」これは9月13日の朝日新聞です。自分の顔を鏡に写して、増え続けるしやしみを見ながら最近鏡を見るたびに悲しくなると言ったら、夫は「おまえは鏡を見る時だけだからいいなあ。おれなんか、それをいつでも見てる。」こういう、これは60歳から95歳までですから、もうすぐですから、今しかないと、考えなくて済みますから、そんなことでいろいろ自分たちの、全部ではないですけれども、ここに載っております。

ぜひひとつ皆さんも部落の老人会に参加して、踊りを踊る方もいるかもしれないけれども、若い方は無理ではないでしょう。ぜひ明るい、楽しいお年寄りの会にぜひ御協力いただきたいと思えます。

以上でございます。(拍手)

山下

ありがとうございました。老人会だけではなくていろいろな会があるということでございまして、せっかくの機会でございますので、こういう会がありますよとか、そういう話がいただけるようでしたらまたお願いしたいと思えますが、Fさん、よろしくお願ひいたします。

Fさん

Fでございますが、Dさんからさっきお話がありましたけれども、人口の13%ぐらいで、大体会員さんは8000人ぐらいだと、しかし老人クラブの方は大体2200人ぐらい、約3分の1ぐらいですね。

もっともっと参加したくても出られないというような人がたくさんいると思うのですが、実はこの2月から準備をして、高齢者と子どもの触れ合いをつくる、これは学校5日制が実施になります、子どもとその触れ合いをつくらうということで、そのNPOの立ち上げがございました。3月に東京都が受理してくれましたので、今月中に民間団体、それは今申し上げた目的は、高齢者のたまり場をつかって、それで老人会とかそういうのに入っていない方、目的ははっきりしているわけではないのですが、できたら社協のボランティアさんたちを連合会に加入させていただいたりとか、NPO、例えば青少年の親善とかありましたね。2~3日前NHKの朝の

番組で放送されましたけれども、そういうものと協力して、とにかく福生をもう少し明るい、立派ないいまちにしたい、そのために頑張っていきたいと思ってつくっているわけです。一生懸命やっていきたいと思いますが、そういう意味でもし御協力が得られるならありがたいと思っています。

山下

ありがとうございます。いろいろな形で御協力をさせていただきたいなと思います。

小林さんが大変よろしいのではないのでしょうかというようなことを今おっしゃっていましたが、ぜひいろいろな形で子ども達との触れ合いをしていただきたいと思います。私の場合、子どもはまだ小さいのですが、やはり目上の方というのでしょうかね、家族は子どもがいて、妻がいて、あとはおじいちゃん、おばあちゃんの6人家族なのですが、普段目上の人と接していると、やはりやさしさみたいなものが身につきますし、自分が疲れていても電車の中ではおじいちゃん、おばあちゃんがいたら、席を譲るように言っているのですね。そういうのが知らず知らずのうちに身につけてきて、非常に子ども達の教育にもプラスになっていくのではないかと、僕自身もそう感じております。

そのほかにまだ何か御意見ございますでしょうか。女性の方もきょうは大勢いらっしやっていたので御意見を申し上げます。

Cさん

Cでございます。先ほどお話をさせていただいた中でちょっと補足したいことがありますので、小林さんをお願いしたらよろしいかと思うのですが、私も牛二老人会は1年に4回ほど集まりがあるので、各年度の総会、それから通常の月例会、忘年会、新年会、そのほとんどが出席して下さった方々の懇親なわけでございますが、その4回のうちの1回、例えば専門の医師とかいろいろな方々を一応お招きして、さらなる健康づくりとか、健康づくりというのは基本的には食生活でございまして、その分野の専門家を招いて話をさせていただくような機会を設けたら、一層の発展につながるのではなからうかと、例えば福生市のシルバー人材センターというところがありまして、あそこの総会ではそういう機会に先生などをお呼びして、健康づくりのお話をちょうだいしているわけですね。ですから市の担当責任者の方々と御相談くださって、そのようなことも付け加えた医療として推進していただければよろしいのではなからうかと、このように思います。

小林

ちょっとその件に関しまして、先生をお呼びしてということなのですが、福生市が東京都の方からモデル指定になったことがございまして、それでその時からですが、去年はちょっとやりませんでしたか、おとしでしたか、ここ2~3年前ぐらいから地元の西村先生をお願いしたり、それか

ら薬の飲み方については、本当にこれは私自身も感じましたことですが、高齢者の方は、最近ちょっとわかりませんが、お薬をいただいて、こんなにいただいてきますよね。そうするとなんかの時にちょっと胃が悪いのだと言いますと、「ちょっときょうはここが気持ち悪い」「私、胃の薬たくさん持っているからあげるよ」とよくもらって飲む方がいらっしやいます。そういうことはいけないですよね。そういうことでお薬の飲み方ですとか、それから脳の、ミツカワ先生とおっしゃいますけれども、あの先生をお呼びして脳の健康診断もこのくらいできますよということで、福老連として取り上げて、何年かずっと続いてやっております。

そして去年は確か、ほかの方で健康づくりについて行ったと思いますけれども、また皆さん方の御要望がありますれば、年に4回は健康講座ということでお医者様ですとか、薬剤師の方ですとかお呼びして講座を持ちますので、東京都の方からも年に4回は健康づくりの講座を持つようにということが、社会福祉協議会の方ですとか、会長ですとか、私達にもきていますので、その時はまた皆様方にもお声をかけして、協力していただきたいと思います。

ここに今ちょっと、時間的によろしいでしょうかね。うちの女性部の副部長が来ていますので、声をかけるなどと言われて呼んだのですね。そのことについてちょっと話してみてください。

Hさん

私、小林さんの下で副部長をさせていただいております。Hと申しますけれども、私も64歳で老人会に入りました。それで10何年かもう経ちますけれども、いろいろなことでぶつかってきて、女性部というのができまして、福祉関係のことにいろいろお手伝いをさせていただいたりして、なんかこれが、老人でもこんなに役に立って、皆さんに喜ばれている、たしになるのかなという感じですが、すごく生きがいを感じまして、今大分もう年もとりましたけれども、まだなんか少しはお手伝いができるかなと思いつつ、東京都の方にもいろいろなことで行かせていただいています。小林さんの下で私も働かせていただいて、何とかお手伝いもできて生きがいを感じております。

福祉まつりとか福祉バザーとか、またこの前ありました老人芸能大会とか、そういうことにもお手伝いをさせていただいて、老人会というのは、老人クラブというので生きがいを感じさせていただいております。これからはできるだけ協力したいと思いますので、どうぞよろしく願いいたします。(拍手)

山下

どうもありがとうございました。

立川

今の件ですがね、教育委員会で確か、いろいろな出前講座というようなことをやったださるようです。ですから教育委員会の方へ申し込めば、い

ろいろなまたボランティアでやってくれるそう
すから。

それと集まりも問題になって、いま少し、なるべ
くたくさん集まる方がいいと思うのですが、私の方
はもう毎年集まっていますけれどもね。集まりが少
ないから、結局だんだんそういうようなこともやっ
てないかと思えますので、ぜひ、ひとつ集まりもた
くさん重ねていただいて、もちろん私の方も大体3
分の1、120名のうちに40人しか集まりません
けれども、それでも毎月やっていればいつかだんだ
んだんその会も増えてくるのではないかと思いま
すし、ぜひ集まりを重ねていただくようお願いし
たいと思います。

Cさん

私どもの方は大体毎回80人、80人の会員なの
ですが、およそ80%は出席していただいております。
ただ会に入っておりますけれどもなかなか会に出
てこれないような状態の方々もいらっしゃいます
ので、そういうことを考えると、出席の方々の%で
いきますと、もっと上昇するなという、とりあえ
ず年に4回やらせていただいておりますのは、それ
は誕生日会等々についてもちょっと控えめにし
ておりますのは、誕生日会というのは該当しない方も
出て来てくださるわけですね。そうすると平日頃
の集会で出て来ない方が誕生日会に該当した時に、ほ
かの該当しない人が出てきてくれるのに、あなたの
ための誕生日会ではないよと、それなのに来てくれ
ないわということになると、いろいろ難しいことも
発生するかなと思って、誕生日会というのはちょ
っと控えている次第です。

以上です。

小林

医療の講座の方は去年も開いておりませんけれ
ども、連合会長の方によく伝えまして、また今年
はどうしても開催するように心がけますので、どうぞ
その節は大勢さんお連れいただきまして、1回はこ
の会場に入り切れなくて大騒ぎになったこともご
ざいますので、そのくらい集まってくださるの
です。ぜひお願いいたします。

山下

いろいろな声が出ております。また健康づくりの
お話などもいろいろ活発になさっていること
ですので、ぜひそういう会に大勢の方が御参加
をいただきたいと思えます。

時間も予定であと10分程度になってまいり
まして、ぜひ御意見を伺いたい方がたくさんいら
っしゃるので、何か日頃思っているようなことが
もしあれば、この機会でございますので、ぜひ御
意見をいただきたいなと思うのですが、いかが
でございますでしょうか。

Gさん

長沢のGと申します。私は実は老人会に入
ってない方の代表ではないのですが、発言者として

きょう参加させていただいて、老人会の皆さん
が大変御活躍なさっていることをお聞きしまし
て感動しております。

ただ、私がなぜ入らないかと申しますと、御
近所の方から私にも、私よりお年寄りですけれ
ども、たまたま教えてくださるのは、やはり老
人会の中でもなかなか難しいことがあるのだと
。だからきつとお前なんか来たら会長にされ
てしまうからとか脅されるわけですね。です
からそんなことで、私もたまたま立川先生
の二回り下で、こし70才になるのですけれ
ども、本当に御老人の集まりは結構な
のですけれども、実は現役で、東京地区の向
こうから来る、外国から来る学生、それか
らこっちから行く学生のお世話といいま
すか、行く人にはやはり向こうへ行って
恥ずかしくないような教育をして、それ
から向こうから来る人には日本に早く慣
れてもらうような教育をしてというので、
1週間に1日か2日は必ず東京へ出て行
っているわけです。

ですからそんな関係で、それもひとつの御
奉仕ではないかなと思って、それ以上老人
クラブに入れていただいて、また逆に御迷
惑をかけたなりなんかするといけません
ので、そっちの方はこれから4~5年
まだありますけれども、そっちの方がく
びになりましたら老人会に入れていた
だいて、健康が許すならぜひ市にも御
協力したいと、そういうふう
に思っているのですよ。

今、たまたま去年からこういうフォー
ラムをやりたい、それから皆さんの中
でこの中にいらっしゃる環境の市
民会議ですか、そういう方にも前
回出席させていただいて、なる
だけ御恩返しをしようという
ことなのです。

先ほど、話題がちょっと前後しま
すけれども、私も20何年前に、申
し上げますけれども、町会に副
会長として6年3期務めさせて
いただいて、うちの家内が「お父
さん、あなたはよそ者ですよ。よ
そ者が今度会長になったらちょ
っとまずいから、私は家に入
っているのだから、絶対に会
長だけはやたらだめですよ、も
うこれでやめなさいよ」と言
ったので、それまでは会長をさ
せていただいて私はもう御恩
を返そうと思ったのです。です
が、そういうことでは御恩返し
はできなかったのです。

そういうことで、いろいろな教育、
こういうことがありますから、
できるだけ自分の意見があれば
自分の意見を申し上げて、それ
からできることだったら自分
の経験を生かして御恩返しを
したいということをしている
のです。

ですからたまたま私は老人会に入
ってなくて、きょうはどうも老
人会に入っていないので肩身が
狭いのですけれども、もしこれ
から先5年ぐらい経ちまして、
向こうの方をくびになりまし
て、元気でいたらぜひ老人会
で御恩をお返ししたいと思
っております。

いつも小林さんは大変御活躍
で、先ほどもお話がありましたよ
うに、選挙の時でも車の中か
ら皆さんにこうやっていら
っしゃる、拝見しております
が、御老人の中の立役者とし
てこれからもお元気に活躍
していただきたいと思いま
す。ぜひ私ども老人会

リードしていただきたい、そう思っております。

きょうはそんなことで大変感動しました。ありがとうございました。（拍手）

山下

ありがとうございました。時間もそろそろ迫ってまいりまして、もう少しで老人クラブ入会の資格を得られる長谷川先生からお話をいただこうかなと思います。

長谷川

なかなかすばらしい進め方をして、しかしやはりシニアになるという心構えと、勝手なことを幾つか言わせていただきました。

シニアというのは地域にとっては貴重な財産なのだというふうに思うのです。その貴重な財産をどうやって地域に生かしたらいいか、難しい問題かと思えます。先ほど少し私の方が勘違いしていたのかもしれませんが、立川さんがボランティアの話がされました。教育委員会も行政の方々が「まなびあいボランティア」を募集していて、別にシニアに限らないのですが、自分の得意な分野を学校教育等に生かしてもらおうとしています。その場合、私達市民が何ができるのかということに自信を持っている、宣伝する必要があると思うのです。一方では地域が何を求めているのかということを私達に伝えていただく、学校でいえば学校は何が欲しいのか、それがわかればかなり具体的になっていくのかなというふうに思います。

老人会のお話をたくさん聞いておりました。たまたま先生をつくる大学におります関係で、学校というのは多少専門とは違うのですけれども、耳に入ってくるのは、例えば新聞等で御承知のとおり、港区では小学校の学区を外した、どこの学区へ行ってもいいと、そんなことも、学校で今後どんどん検証されてくるだろうと、福生あたりでも将来的にはそういう検討もしていかなければいけないのかなと教育委員会の方でも言っているようであります。

老人会という組織も、競争的社会になって特色あるまちづくり、特色ある老人会づくりを求められます。そうしますと老人会の方向によっては、地域が束ねている老人クラブがあるのですけれども、地域は今町会を一つの単位にしておられる、それだけでいいのだろうか。要するにもっと特色があって、うちの老人クラブはこういう奉仕活動をたくさんやると、先ほどおっしゃっていた寝たきりの先輩たちを訪ねるとか、励ますとか、そういうことを主としてやる。それは日本企業にも伝わるのかもしれませんが、きっとそんなやり方もあるのかなという、勉強を山ほどさせられてしまって、シニアになるのはちょっと怖い面があります。

山下

どうもありがとうございました。ほかにまだまだ御意見をいろいろたくさん伺いたいところなのですが、そろそろ予定の時刻となってまいりました。

きょう御出席の方、皆さん生きがいを持って、年

齢に関係なく生き生きと輝いていらっしゃるというのが最後の印象でございます。

それでは、最後に野澤市長から締めのごあいさつをいただいて、きょうの会をお開きにさせていただきますと思います。

市長

皆さんがこういうやり方をしていくと輝くのだなというのが非常によくわかります。その部分をこれからどんなふうに、大勢の市民の人達、さっき8000人というような説明でしたけれども、もちろん入院されている方もいらっしゃいますし、一人で生活していらっしゃる方もいる、誰とも交渉せずに寂しく生きている方もいる、そういうみんなが住んでいる、それぞれの人とともにどんなふうに育てていったらいいかなという、そんな思いをしながら聞いておりました。きょうは「輝くシニア」というテーマで、コーディネーターの山下さん、長谷川さん大変ありがとうございました。

それから、こういう形で生きていくと私達みたいに元気になっていくという立川さんと小林さんにいろいろなすばらしい経験を伺えました。立川さんの言葉はすごいですね。もっと教えてくださいよという、この辺が輝いて生きる秘訣かなと思えました。大変ありがとうございました。（拍手）

- 終了 -